

2018年
7月4日
水曜日

原田 哲史 教授（文化と社会の経済学・経済哲学）

いまアダム・スミスの『道徳感情論』（一七五九年）が面白い！

つもより熱が入った。

スミスはこう言っている。「富と名誉と出世をめざす競争において、彼はすべての競争者を追い抜くために、できる限り力走してもいいし、あらゆる神経、あらゆる筋肉を緊張させていい。しかし、彼がもし競争相手のうちの誰かを押しのかたり投げ倒したりするならば、観察者たち *spectators* の寛容は完全に終了する。それはフェアプレーの侵犯 *violation of fair play* であって、観察者たちが許しえないことなのである。このやられた相手も——観察者たちからすれば——あらゆる点で彼と同じ程度に善良なのであり、だから観察者たちは、これほど極端に自分を優先する彼の自愛心 *self-love* に共感できないのである。」（水田訳・岩波文庫（上）、二一七—二一八頁）

これは、まさに悪質タックル問題をめぐる社会的追及プロセスそのものではないか！ スミスは二五〇年以上前に、そのことを指摘している!! スミスが生涯出した本は『道徳感

情論』（一七五九年）と『国富論』（一七七六年）のふたつだけであり、前者はいわば社会心理学の書であって、『国富論』の人間学的な基礎をなす。近代社会になって人間が自己愛・利己心から出発して行動することは否定できない事実であるどころか、むしろその進歩的な側面に目を向けていくべきであるが、同時に、人間の利己心が過度になるのを相互の社会関係のなかで抑制・緩和できるメカニズムを認識していかなければならない、というのがスミスの一貫したテーマであった。自由主義者スミスはつねに、その抑制メカニズムを強権的な圧力にはなく、普通の人間同士のやり取りのなかに見出そうとした。

『道徳感情論』における、「フェアプレーの侵犯」を複数の「観察者たち」によって監視して、その批判を一般化して、公正さを社会的に確保していくという、不正を憎む人間心に根差した、過度な利己心の抑制の論理は、『国富論』において、自

二〇一八年五月の末（5/21）学会でドイツに行っていたその間、あの日大の選手による悪質タックルの問題が大きく報道され、それへの非難の声が急速に全国に広まってきた。関学側からの抗議と真相究明の要求が正当なものとして支持されていった。日本を発つ前はその発端であったが、ドイツ滞在中にもインターネット上でのタックルの動画を見ることができ、あれよあれよという間に、こうしたフェアプレーを汚す行為が広範な人々に観察されて、非難の世論が形成されていったのである。帰国したときには、世論はほぼ確定していた。

さて、帰国後の初日の講義が「経済の歴史と思想」「社会思想史」で、いずれも経済学の本格的な確立者アダム・スミス（一七二三—一七九〇年）を扱う日だった。いつものようにスミスの思想を彼の最初の著作『道徳感情論』について引用とともに説明するところから始めるのだが、その日は、次の箇所の話をするとき、い

由競争の市場経済において特定の人々が暴利をむさぼるのではなく、各人が利己心から出発しても公正であれば穏当な利益を得るという「見えないう手」の論理につながっていく。

このような意味で、経済学はその確立段階ですでに人間の心理と社会的な作用という基礎を持つていたのであって、スミスを学ぶときにも、『国富論』の経済学を狭く捉えるよりも、むしろ『道徳感情論』を含めてスミス思想の総体を理解しようとする方が、現代の問題を考えるうえでより多くの示唆を得ることができるのである。

6月初めにあった東京大学での経済史学会では、偶然にも、田中秀夫氏（愛知学院大学教授、京都大学名誉教授）も『道徳感情論』の上記の論理と悪質タックル問題との対応を指摘した。スミスを知りたい者は皆、その面白さを共有したいと思ってい